

ビール麦の品質改善に関する研究

第1報 ビール麦のは種期と品質の関係について

宮下茂樹・中甫木一夫
(鹿児島県農業試験場鹿屋支部)

MIYASHITA, S. and NAKAHONOGLI, K.
Studies on the Improvement of Quality in Two-rowed Barley
(1) Effect of seedling time on the Quality in Two-rowed Barley

鹿児島県における麦の栽培動向は小麦・裸麦の減少とは逆に、ビール麦の栽培面積が漸増を示し、最近では南薩の旧契約栽培地帯にとどまらず、大隅半島の内陸部にも契約地帯が伸びつつある。

一方ビール麦は品質を重要視する商品作物であるが、雨害、高蛋白、低進粒歩合など幾多の問題点が多く、特に内陸部の黒色火山灰土地帯では進粒歩合が著しく低い実情にある。この点を重要視し、1965～1967年まで、は種期とこれらの品質との関係について検討をおこなった。

試験方法

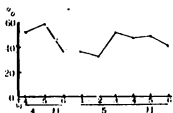
供試品種は成城17号(1966, 67年)さつき2条(1965年)で、は種期は11月5日から10日置に3段階(1965年は4段階)とし、施肥量並びには種量との組み合わせで試験を実施した。

また1965, 66年は大隅半島沿岸部から内陸部にかけて、気象条件、土壌条件で特徴のある現地4ヶ所で試験を併行して実施した。

結果および考察

(1) は種期と雨害回避：ビール麦の品質の低下に対して雨害も大きな影響を与えているが、降雨頻度からみてできるだけ安定した時期に収刈作業がおこなわれるよう、成熟期を調整する必要がある。

当地における連続3日以上は無降水日数出現率(第1図)からみると、4月4, 5半旬, 5月3～5半旬の出現率が高い。しかし4月4, 5半旬刈取は



第1図 3日以上無降水日数出現率(20年間)

第1表 は種期と成熟期

年次	11月5日まき	11月5日まき	11月25日まき
	月 日	月 日	月 日
1965	4・24	5・1	5・10
1966	4・30	5・5	5・8
1967	5・4	5・9	5・13
平均	4・29	5・5	5・10

不可能であり、結局5月3～5半旬が気象からみた適当な収刈時期と考えられる。このためにはは種期を11月下旬以降にする必要がある。(第1表)

(2) は種期と品質：品質のうち特に進粒歩合について検討をおこなったが、年次間の変動が著しく大きいのが、は種期との関係はおそいほど進粒歩合が高いと云える。したがって11月下旬以降が進粒歩合からも適当なは種期であると判断される。現地試験結果でも同様なことが云える。

第2表 は種期と進粒歩合、収量

は種期	1965	1966	1967	平均	3ヶ年平均収量(kg)
11・5	62.6	57.6	63.8	61.3	22.4
11・15	59.2	53.9	74.2	62.4	24.8
11・25	57.1	73.3	86.8	72.4	29.1
12・5	68.6				(進粒重)

蛋白含有率とは種期との関係はさほど明瞭でない。このことから11月下旬以降をは種適期として支障はないと考えられる。

(3) は種期と収量：収量も年次間変動が大きいのは種期との関係はおそまきほど多収の傾向にあった。このことは早まきでは無効茎の多発、栄養生理に原因する生育停滞が関与して進粒歩合、千粒重など稔実が低下したことによるものと考えられる。したがって収量からみたは種適期も雨害、品質からみたは種適期と合致した。